

藤野先生

魯迅

(訳 横田勤)

東京も格別のことはなかつた。上野の桜が爛漫と美しく咲く時節、眺めると確かに紅色のふわっりとした雲のようではあったが、花の下には必ず群れを成し隊を組んだ「清国の留学生」の速成班〔短期留学生〕の者がいた。頭の上にはぐるぐる巻いた大きな弁髪、その上に載せた学生帽は高々とそびえ立ち、「富士山」を形成していた。他にも、弁髪を解いて平たく巻いた者もいて、帽子をとると油でテカテカ光っており、さながら少女が髪を結っているようで、これで首でもひねってみせれば、実に色気は満点だろう。

中国留学生会館の入り口の部屋では何冊かの本を売っていたので、時には立寄ってみる価値があつた。午前中なら、中のいくつかの洋間も、居心地は悪くなかつた。だが夕方になると、ある部屋の床がいつもドンドンと地響きを立て、しかも部屋には煙とほこりが充満した。事情通に尋ねたら、「ダンスを練習しているんだ」との答えだった。

別の土地に行ってみるのはどうだろう？

私はそこで仙台の医学専門 学校に行くことにした。東京から出発し、ほどなくしてある駅に着いた。「日暮里」と書いてあつた。どうしてだか分からないが、いまだにこの名前を覚えている。その次はただ「水戸」を覚えているだけだ。ここは明の遺民、朱舜水先生が客死したところだ。仙台は市であるが決して大きくなく、冬の寒さは厳しく、まだ中国の学生はいなかつた。

だいたい、物は少なければ重宝がられる。北京の白菜が浙江に運ばれると、赤い紐で根元が縛られ、果物屋の店に逆さに掛けられ、「山東菜」と尊んで呼ばれ、福建に野生のアロエは北京に着くや温室へ招き入れられ、かつ、その名も美しく「龍舌蘭」と称される。私も仙台に着いて、まさにこのような優待を受けた。授業料が免除になったのみならず、何人かの職員が食事と宿舎にまで気をつけてくれた。私はまず監獄のそばの旅館に住んだ。すでに初冬ですこぶる寒い、なのに蚊が多い。しまいには布団で全身を覆い、服で頭と顔を包み、息をするために二つの鼻の穴だけ出しておいた。いつも息が出ているところへは、蚊も口の挿しようようがなく、やっと安眠できた。食事も悪くなかった。しかしある先生は、この旅館が囚人の食事を作るのを引き受けていることから、私がそこに住んでいるのはふさわしくないと、何回も説得した。この旅館が囚人の食事を作っているのと私は何の関わりもないと思っていたが、好意はむげに断ることもできず、仕方なく住むにふさわしい別のところを探した。そうして別の家に引っ越した。監獄からは離れているが、残念なことに、毎日、飲みにくい芋がらの汁を飲まなければならなくなった。

この時から多くの初対面の先生と出会い、多くの新鮮な講義を聴くことができた。解剖学は二人の教授が分担した。最初は骨学である。その時入ってきたのは、色が黒く痩せた先生で、八字ひげを生やしメガネをかけ、脇に大小の書物を挟んでいた。書物を教壇の上に置くや、緩やかな、そして抑揚の強い口調で、学生たちに向って自己紹介をした。「私が藤野巖九郎という者でして……」

後ろの方で何人かの笑い声が起こった。彼は引き続いて、解剖学の日本での発達の歴史を話した。あの大小の書物は、最初から今までの、この学問に関する著作であった。初めのころの何冊かは、和綴じ本であり、中国語の訳本の翻刻本もあった。彼らが行なった新しい医学の翻訳と研究は、中国と較べて、決して早く

はなかったのだ。

後方に座っていて笑ったのは前年度及第できなかった落第生で、すでに在校一年であり、裏話にはすこぶる熟知していた。彼らは新入生に、教授一人一人の来歴を話して聞かせた。

この藤野先生は、聞くところによれば服の着方に無頓着で、時には何と蝶ネクタイを締めるのを忘れることもあった。冬は古いオーバー一枚で寒さに震えている。ある時など、汽車に乗っていた時、車掌が彼のことをスリではないかと疑い、車内の客に注意をうながしたこともあった。

彼らの話はだいたい本当であり、私はある時、彼が蝶ネクタイを付けないで教室に現れたのをこの目を見た。

一週間が過ぎ、多分土曜日だっただろう、彼は助手をよこして、私に来るようにと言った。研究室に行くと、彼が人骨と多くの単独の頭蓋骨の間に座っているのが見えた。——彼はその時ちょうど頭蓋骨の研究中であり、その後、本校〔仙台医学専門学校〕の雑誌に論文が発表されている。

「私の講義を書きとることができますか？」と彼は尋ねた。

「少しできます」

「持ってきて見せなさい」

私が書き写したノートを出すと、彼は受け取った。そして二、三日後に返してくれて、これから毎週、持ってきて見せるようにと言った。ノートを持ちかえって開いてみたとき、私は驚いた。と同時に、ある種の不安と感激に襲われた。ノートの初めから終わりまですべて、赤い色の筆で添削してあって、多くの脱落していた部分を書き加えてあるだけでなく、文法の間違いまで、みんなひとつひとつ訂正してあるのだ。これが、彼が担任する学科の骨学、血管学、神経学が終わるまで、ずっと続いたのである。

残念ながら私はあの時、一生懸命勉強するほうではなく、ある時はたいへんわがままでさえあった。今でも覚えているが、ある時、藤野先生が私を研究室へ呼び、私のノートをめくって一つの図を見せた。それはひじから手首までの腕の血管で、彼は指さしながら私に向かって優しく言った。

「見てごらん、君はこの血管の場所をちょっとずらしたね——もちろんこのようにすると見栄えが良いのは確かだ。けれども、解剖図は美術ではない。実物がそうなっているものを、私たちが変えるわけにはいかないんだ。今ちゃんと直してあげたから、これからは黒板に書いてある通りに写しなさい」

ただし、私はまだ承服しておらず、口先では分かりましたと言ったものの、心の中ではこう思った。「やはり私の描いた図のほうがとてもよく描けています。実際の状態は頭の中にももちろんちゃんと入っています。」

学年試験が終わってから東京へ行って一夏遊び、初秋になって学校に戻った時、すでに成績は発表されていた。同学年の百人中、私は中ほどにいて、落第しなくてすんだ。今度は藤野先生担任の授業は、解剖実習と局部解剖学であった。解剖実習をしておよそ一週間たったとき、彼がまた私を呼んだので行ってみたところ、大変上機嫌で、例の極めて抑揚のある口調で言った。

「聞くところによると中国人はたいへん靈魂を敬い重んじるというので、君が死体解剖を承知しないんじゃないかと心配だった。まずは安心したよ、そんなことが無くてね」

ただし、彼もたまには私をたいへん困らせる時があった。彼は中国の女は纏足をすると聞いているが詳細は知らない、それでそのように纏足するのか、足の骨はどのように奇形になるのか、と聞いて、その上ため息をついて言った。「どうしても一回は見てもみないと分からないね。いったいどういうんだろうね」

ある日、同級生の学生会の幹事が私の下宿にやってきて、ノートを貸してくれ

と言った。取り出して彼らに渡すと、ただ一通り開いて見ただけで、持っていかなかった。しかし彼らが行ってすぐ、郵便配達が一通のぶ厚い手紙を届けてきた。開いてみると最初の文句は「汝、悔い改めよ！」だった。これは新約聖書にある言葉だろうが、最近、トルストイによって引用されたものだ。当時はちょうど日露戦争のころで、トルストイ先生はロシアの皇帝と日本の天皇に手紙を書いたが、書き出しがこの一句であった。日本の新聞は彼の不遜を厳しく責め、愛国青年は憤然とした。だが彼らもしらないうちに、すでにトルストイの影響を受けていたというわけだ。この一句の次に、藤野先生がノートに印を付けてくれたので、昨年の解剖学の試験問題を私が前もって知っていた、だからこのような成績が取れた、というようなことが書いてあり、末尾は匿名だった。

私はここで初めて、何日か前のあるできごとを思い出した。同級会が開かれるというので、幹事が黒板に通知を書いたのだが、最後の言葉が「全員漏れなく出席されたし」で、しかも「漏」の字の横に丸印が付いていた。私はそのとき、丸が付いているのはおかしいとは思ったが、別に気にもとめなかった。いま初めて、あの字が私を皮肉ったもの、つまり、教員が漏らした問題を私が手に入れたと言っているのだと悟ったのである。

私はすぐにこのこと藤野先生に報告した。幾人かの私と親しい同級生も大いに憤って一緒に幹事のところに行き、口実を作ってノートを調べた無礼を非難し、彼らに調べた結果を発表するよう要求した。最後にはこのデマは消滅したのだが、幹事は匿名の手紙を回収するべく手を尽くし、結局は私がこのトルストイ式の手紙を彼らの手へ返すことで一段落した。

中国は弱い国である。したがって中国人は当然低能児であり、六十点以上の点数がとれたのは自分の能力ではない。彼らがこう疑うのも無理はない。だが、引き続いて、私は中国人が銃殺されるのを見るという運命に巡り合った。第二学年

では、細菌学が加わり、細菌の形状がすべて幻燈機で映して示されるのだが、一段落終わっても授業時間が残っているときには、 いくつかの時事を写したのもも映写された。当然みんな日本がロシアに勝った場面を撮ったものばかりであった。だが、その中に中国人の出てくる ものがあり、彼はロシア人のためにスパイを働いたというので日本軍に捕らえられ、銃殺刑になったのだ。取り囲んで見ているのは一群の中国人で あり、教室の中にも一人、私がいた。

「万歳！」彼らはみんな拍手して歓声を上げた。

この種の歓声はそのような幻燈を見る度に上がったのだが、私はそれを聞くと非常に気分が悪くなった。その後、中国へ帰ってから私は銃殺される犯人をのんきに見物している人々を見たが、彼らは酒に酔ったように喝采している。——ああ、もはや言うべき言葉もない！ しかし、この時、 この地で、私の考えは変わったのだ。

第二学年の終わり、私は藤野先生を訪ねていき、自分はもう医学を学ぶのをやめ仙台を離れる、と告げた。彼の顔には少し悲しそうな表情が浮かび、何か言いたそうであったが、結局何も言わなかった。

「私は生物学を学ぼうと思っています。先生が教えてくれた学問は、やはり役に立ちます」と言った。実は生物学を学ぶことはまったく決めていなかったのだが、彼が悲しんでいるように見えたので、慰めるために嘘を言ったのである。

「医学のために教えた解剖学の類は、おそらく生物学に関しては何の助けにもならないだろう」と、彼はため息をついて言った。

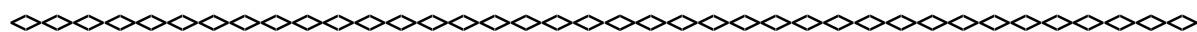
出立する何日か前に、彼は私を家に呼んで、一枚の写真をくれた。その裏には「惜別」の二文字が書かれていた。それから私の写真も欲しいのだがと言った。だが、私はあいにくその時写真を撮っていなかったもので、彼は、将来写真を撮ったら送ってよこすように、それと常にこの後の状況を彼に手紙で報告するように

と、何度も何度も言った。

私は仙台を離れた後、何年も写真を撮っておらず、また状況も思わしくなく、何かを書いたところで彼を失望させるだけだと思うと、手紙を書く勇気が起こらなかった。年月が経過するにつれて、今さら改まって書きにくくなり、そのため、時には手紙を書こうと思ったが、なかなか筆をとることができなかった。このようにして今に至り、ついに一通の手紙も一枚の写真も送らずじまいになった。彼の方から見れば、ひとたび去った後、音信がまったく途絶えたということだ。

しかし、なぜだか分からないが、私は今でもよく彼を思い出す。私が自分の恩師と思う人の中で、彼は最も私を感激させ、私を励ましてくれた一人だ。私はいつも思う。彼が私に対して強く希望し、たゆまぬ教誨を与えてくれたのは、小さく言えば中国のため、すなわち中国に新しい医学が生まれることを願っていたからであり、大きく言えば学術のため、すなわち新しい医学が中国へ伝わるのを願っていたからである。彼の姓名は決して多くの人の知るところではないが、彼の性格は、私の目には、そして私の心の中では偉大である。

私は彼が訂正してくれたノートを綴じて三冊の厚い本にし、永遠の記念として大事にしまっておいた。不幸なことに、七年前に転居した時、途中で本箱を一つ壊してしまい、その本箱の中の半分の書物をなくした。あいにくこのノートも紛失したものの中に入っていた。運送屋に督促して探させたが、まったく返事がなかった。ただ彼の写真だけが、今でも北京の家の東側の壁の、机に面したところに掛かっている。毎夜、疲れて怠けなくなる時、ふと上を向いて、明かりの中に黒い瘦せた、今にも抑揚の強い口調で話しだしそうな彼の顔が目に入ると、たちまち私は良心に目覚め、かつ勇気を与えられ、そこでタバコに一本火をつけ、再び正人君子の輩に深く憎まれる文字を書き続けるのである。



东京也无非是这样。上野的樱花烂漫的时节，望去确也像绯红的轻云，但花下也少不了成群结队的“清国留学生”的速成班，头顶上盘着大辫子，顶得学生制帽的顶上高高耸起，形成一座富士山。也有解散辫子，盘得平的，除下帽来，油光可鉴，宛如小姑娘的发髻一般，还要将脖子扭几扭。实在标致极了。

中国留学生会馆的门房里有几本书买，有时还值得去一转；倘在上午，里面的几间洋房里倒也还可以坐坐的。但到傍晚，有一间的地板便常不免要咚咚咚地响得震天，兼以满房烟尘斗乱；问问精通时事的人，答道，“那是在学跳舞。”

到别的地方去看看，如何呢？

我就往仙台的医学专门学校去。从东京出发，不久便到一处驿站，写道：日暮里。不知怎地，我到现在还记得这名目。其次却只记得水户了，这是明的遗民朱舜水先生客死的地方。仙台是一个市镇，并不大；冬天冷得利害；还没有中国的学生。

大概是物以希为贵罢。北京的白菜运往浙江，便用红头绳系住菜根，倒挂在水果店头，尊为“胶菜”；福建野生着的芦荟，一到北京就请进温室，且美其名曰“龙舌兰”。我到仙台也颇受了这样的优待，不但学校不收学费，几个职员还为我的食宿操心。我先是住在监狱旁边一个客店里的，初冬已经颇冷，蚊子却还多，后来用被盖了全身，用衣服包了头脸，只留两个鼻孔出气。在这呼吸不息的地方，蚊子竟无从插嘴，居然睡安稳了。饭食也不坏。但一位先生却以为这客店也包办囚人的饭食，我住在那里不相宜，几次三番，几次三番地说。我虽然觉得客店兼办囚人的饭食和我不相干，然而好意难却，

也只得别寻相宜的住处了。于是搬到别一家，离监狱也很远，可惜每天总要喝难以下咽的芋梗汤。

从此就看见许多陌生的先生，听到许多新鲜的讲义。解剖学是两个教授分任的。最初是骨学。其时进来的是一个黑瘦的先生，八字须，戴着眼镜，挟着一叠大大小小的书。一将书放在讲台上，便用了缓慢而很有顿挫的声调，向学生介绍自己道：

“我就是叫作藤野严九郎的……。”

后面有几个人笑起来了。他接着便讲述解剖学在日本发达的历史，那些大大小小的书，便是从最初到现今关于这一门学问的著作。起初有几本是线装的；还有翻刻中国译本的，他们的翻译和研究新的医学，并不比中国早。

那坐在后面发笑的是上学年不及格的留级学生，在校已经一年，掌故颇为熟悉的了。他们便给新生讲演每个教授的历史。这藤野先生，据说是穿衣服太模胡了，有时竟会忘记带领结；冬天是一件旧外套，寒颤颤的，有一回上火车去，致使管车的疑心他是扒手，叫车里的客人大家小心些。

他们的话大概是真的，我就亲见他有一次上讲堂没有带领结。

过了一星期，大约是星期六，他使助手来叫我了。到得研究室，见他坐在人骨和许多单独的头骨中间，——他其时正在研究着头骨，后来有一篇论文在本校的杂志上发表出来。

“我的讲义，你能抄下来么？”他问。

“可以抄一点。”

“拿来我看！”

我交出所抄的讲义去，他收下了，第二三天便还我，并且说，此后每一星期要送给他看一回。我拿下来打开看时，很吃了一惊，同时也感到一种不安和感激。原来我的讲义已经从头到末，都用红笔添改过了，不但增加了许

多脱漏的地方，连文法的错误，也都一一订正。这样一直继续到教完了他所担任的功课：骨学、血管学、神经学。

可惜我那时太不用功，有时也很任性。还记得有一回藤野先生将我叫到他的研究室里去，翻出我那讲义上的一个图来，是下臂的血管，指着，向我和蔼的说道：

“你看，你将这条血管移了一点位置了。——自然，这样一移，的确比较的好看些，然而解剖图不是美术，实物是那么样的，我们没法改换它。现在我给你改好了，以后你要全照着黑板上那样的画。”

但是我还不服气，口头答应着，心里却想道：

“图还是我画的不错；至于实在的情形，我心里自然记得的。”

学年试验完毕之后，我便到东京玩了一夏天，秋初再回学校，成绩早已发表了，同学100余人之中，我在中间，不过是没有落第。这回藤野先生所担任的功课，是解剖实习和局部解剖学。

解剖实习了大概一星期，他又叫我去，很高兴地，仍用了极有抑扬的声调对我说道：

“我因为听说中国人是很敬重鬼的，所以很担心，怕你不肯解剖尸体。现在总算放心了，没有这回事。”

但他也偶有使我很为难的时候。他听说中国的女人是裹脚的，但不知道详细，所以要问我怎么裹法，足骨变成怎样的畸形，还叹息道，“总要看一看才知道。究竟是怎么一回事呢？”

有一天，本级的学生会干事到我寓里来了，要借我的讲义看。我检出来交给他们，却只翻检了一通，并没有带走。但他们一走，邮差就送到一封很厚的信，拆开看时，第一句是：

“你改悔罢！”

这是《新约》上的句子罢，但经托尔斯泰新近引用过的。其时正值日俄战争，托老先生便写了一封给俄国和日本的皇帝的信，开首便是这一句。日本报纸上很斥责他的不逊，爱国青年也愤然，然而暗地里却早受了他的影响了。其次的话，大略是说上年解剖学试验的题目，是藤野先生在讲义上做了记号，我预先知道的，所以能有这样的成绩。末尾是匿名。

我这才回忆到前几天的一件事。因为要开同级会，干事便在黑板上写广告，末一句是“请全数到会勿漏为要”，而且在“漏”字旁边加了一个圈。我当时虽然觉到圈得可笑，但是毫不介意，这回才悟出那字也在讥刺我了，犹言我得了教员漏泄出来的题目。

我便将这事告知了藤野先生；有几个和我熟识的同学也很不平，一同去诘责干事托辞检查的无礼，并且要求他们将检查的结果，发表出来。终于这流言消灭了，干事却又竭力运动，要收回那一封匿名信去。结末是我便将这托尔斯泰式的信退还了他们。

中国是弱国，所以中国人当然是低能儿，分数在60分以上，便不是自己的能力了：也无怪他们疑惑。但我接着便有参观枪毙中国人的命运了。第二年添教霉菌学，细菌的形状是全用电影来显示的，一段落已完而还没有到下课的时候，便影几片时事的片子，自然都是日本战胜俄国的情形。但偏有中国人夹在里边：给俄国人做侦探，被日本军捕获，要枪毙了，围着看的也是一群中国人；在讲堂里的还有一个我。

“万岁！”他们都拍掌欢呼起来。

这种欢呼，是每看一片都有的，但在我，这一声却特别听得刺耳。此后回到中国来，我看见那些闲看枪毙犯人的人们，他们也何尝不酒醉似的喝采，——呜呼，无法可想！但在那时那地，我的意见却变化了。

到第二学年的终结，我便去寻藤野先生，告诉他我将不学医学，并且离

开这仙台。他的脸色仿佛有些悲哀，似乎想说话，但竟没有说。

“我想去学生物学，先生教给我的学问，也还有用的。”其实我并没有决意要学生物学，因为看得他有些凄然，便说了一个慰安他的谎话。“为医学而教的解剖学之类，怕于生物学也没有什么大帮助。”他叹息说。

将走的前几天，他叫到我他家里去，交给我一张照相，后面写着两个字道：“惜别”，还说希望将我的也送他。但我这时适值没有照相了；他便叮嘱我将来照了寄给他，并且时时通信告诉他此后的状况。

我离开仙台之后，就多年没有照过相，又因为状况也无聊，说起来无非使他失望，便连信也怕敢写了。经过的年月一多，话更无从说起，所以虽然有时想写信，却又难以下笔，这样的一直到现在，竟没有寄过一封信和一张照片。从他那一面看起来，是一去之后，杳无消息了。

但不知怎地，我总还时时记起他，在我所认为我师的之中，他是最使我感激，给我鼓励的一个。有时我常常想：他的对于我的热心的希望，不倦的教诲，小而言之，是为中国，就是希望中国有新的医学；大而言之，是为学术，就是希望新的医学传到中国去。他的性格，在我的眼里和心里是伟大的，虽然他的姓名并不为许多人所知道。

他所改正的讲义，我曾经订成三厚本，收藏着的，将作为永久的纪念。不幸 7 年前迁居的时候，中途毁坏了一口书箱，失去半箱书，恰巧这讲义也遗失在内了。责成运送局去找寻，寂无回信。只有他的照相至今还挂在我北京寓居的东墙上，书桌对面。每当夜间疲倦，正想偷懒时，仰面在灯光中瞥见他黑瘦的面貌，似乎正要说出抑扬顿挫的话来，便使我忽又良心发现，而且增加勇气了，于是点上一枝烟，再继续写些为“正人君子”之流所深恶痛疾的文字。

